

サクセスフル・エイジングに向けての準備行動形態が主観的幸福感に与える影響

○ 早稲田大学大学院人間科学研究科 茨木 裕子 (8775)

キーワード：サクセスフル・エイジング、主観的幸福感、準備行動

1. 研究目的

高齢化が進む中、サクセスフル・エイジングに向けての高齢者の役割のあり方と、それへの適応に関心が高まっている。その中、ライフスキルは、高齢期以前に蓄積され、その経験が高齢期の生活に影響することからサクセスフル・エイジング研究の要といわれている（古屋・他，2008）。いわば、退職前のライフスキルが高齢期の生活に影響しているということである。しかしながら、従来のサクセスフル・エイジングや高齢期のライフスキルに関する研究は、主に退職後の高齢者が対象になっており、退職時以前の世代からのその要因を捉えた研究はまれである（小田，1998）。

そこで本研究では、退職時以前のライフスキルの蓄積と老後の準備行動の関連に注目し、サクセスフル・エイジングの要因を探ることとする。まず、サクセスフル・エイジングの要因と対象を明確化するために、老後の役割や対人交流、精神面の充実など老後生活への意識（以後、向老意識とする。）や老後に向けての準備行動と主観的幸福感に対する客観的な評価尺度を導入し、その関連を検討する。さらに、年齢階層に注目し、サクセスフル・エイジングに向けた準備行動の多様さを明らかにすることを目的とする。

2. 研究の視点および方法

（1）研究の視点

年齢階層別を中心として①老後の準備行動と向老意識が主観的幸福感（サクセスフル・エイジング）に与える影響、②社会活動の意識が老後の準備行動に与える影響の両者についてその要因を探った。

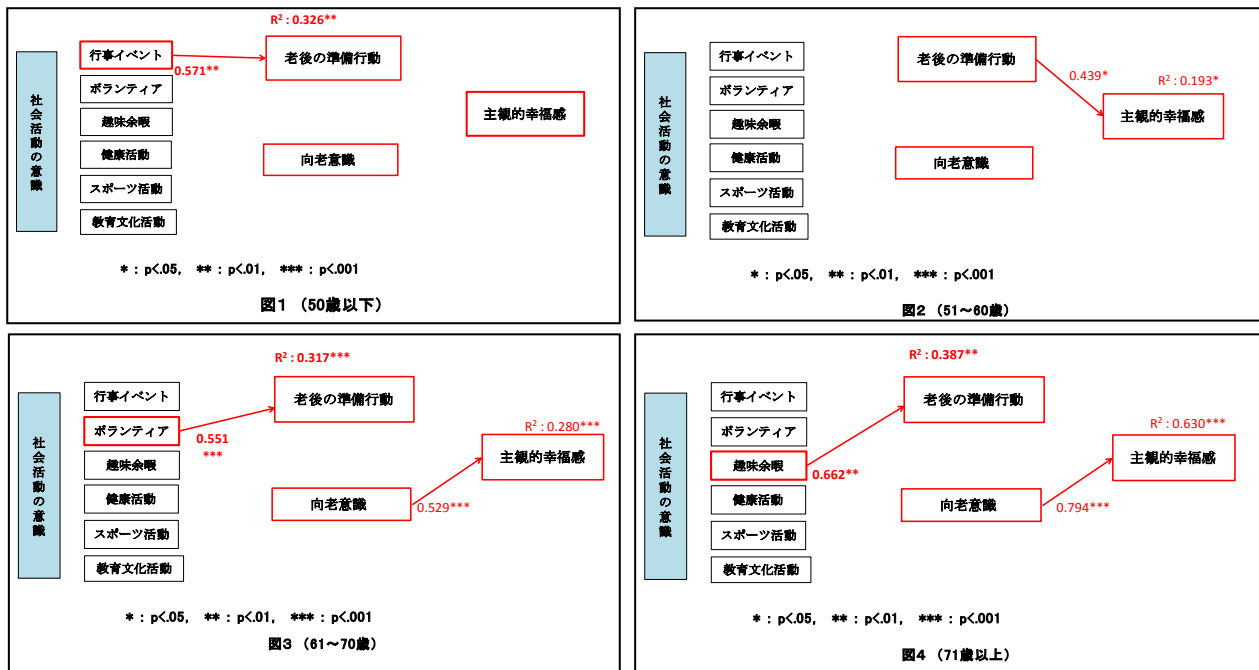
（2）調査方法

調査方法は2013年7月、A大学で実施された市民講座の参加者178名を対象にし、質問紙調査を行った。回答者158名（男性32名、女性124名、不明2名）、回収率88.8%であった。なお、尺度は改定PGCモラル・スケール（Lawton, 1975）、老後に向けての準備行動尺度（平岡，1990）、向老意識尺度（宇佐見，1994）を用い、各尺度と関連要因を検討するために、多変量解析を行った。

3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会の研究倫理指針に準拠し、対象者には研究の趣旨と個人情報への厳守について十分な説明を行い、調査協力を得た。

4. 研究結果



(1) 老後の準備行動と向老意識が主観的幸福感に与える影響

50歳以下では老後の準備行動、向老意識とも主観的幸福感に対しての関係は見られなかった。51~60歳では老後の準備行動ができていない人ほど主観的幸福感が高かった。61歳以上では、向老意識が高い人ほど主観的幸福感が高かった。

(2) 社会活動の意識が老後の準備行動に与える影響

50歳以下では行事イベントの社会参加が老後の準備行動を高める要因になっていたが、51~60歳では、老後の準備行動を高める社会参加の要因は何も見つからなかった。61~70歳ではボランティア、71歳以上では趣味・余暇活動が老後の準備行動を高める要因となっていた。

5. 考察

本研究では、社会活動の意識が老後の準備行動に与える要因、および老後の準備行動と向老意識が主観的幸福感に与える要因は、ともに年代別に異なることが明らかになった。これは、老後の準備行動や向老意識および社会活動の意識が年を経るに従って変化していくことを示すものであり、サクセスフル・エイジングに向けて、年代別に支援するアプローチを変えていく必要性を示唆する。

しかし、本研究では老後の準備行動と主観的幸福感の関連が明らかになったものの、その要因となる老後のための準備行動形態や類型については限定的であった。これらの課題を踏まえ、今後、中高年の老後の準備行動の背景や要因を多方面から捉え、さらに、検討を続けていきたい。